

【東葛北地区】

家庭科におけるICTの活用について

— 「令和の日本型学校教育」の実現に向けて —

1 はじめに

現代社会において情報通信技術（ICT）は公私を問わずあらゆる場面で欠かせない存在となっている。文部科学省作成の「教育の情報化に関する手引」にもあるように、これからの時代を生きる子どもたちにとってICT機器は、鉛筆やノートと同じように日常的に使う道具となることは間違いないだろう。全国の小中学校における一人一台端末の普及率は2021年3月の段階で98.5%とほぼ全ての学校で配備が終了し、すでに運用段階に入っている中学校も多い。今年度以降順次、小中学校で個人の端末で学んできた児童・生徒が高校に入学してくることを鑑み、今改めて「ICTの活用」「日本が目指す学校教育像」について根本的に学びたいと考え本テーマを設定した。

2 研修計画

- (1) 令和5年6月7日（火）研究協議・テーマの決定
- (2) 令和5年8月28日（月）研修会　【会場：千葉県立流山南高等学校 応接室・コンピュータ室】
講師：千葉県立流山南高等学校長 滑川 敬章 氏

3 研修内容

- (1) 「観」の転換 ～コンテンツベースからコンピテンシーベースへ～

新学習指導要領ではこれまでの4観点から「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」の3観点に変更された。授業づくりを考える際には、この転換の本質をまず理解する必要がある。AIの発達・グローバル化の進展など、変化の激しい現代社会において柔軟に変化に対応していくためには、質の高い知識・有用な技能を「実際に生きて働くものとして身につけること」「知識・技能を使いこなす能力が育っていること」が何より重要である。評価の観点が変化するということは「学力観」「授業観」「学習観」全てが変化することであり、授業改革は必要不可欠である。教科固有の知識を覚えることに重きを置いた従来型の授業（コンテンツ・ベースの授業）から、知識を活用するための思考力・判断力・表現力や主体的に学習に取り組む態度などの資質・能力を身につけることを重視した授業（コンピテンシー・ベースの授業）へと我々指導者はマインドセットしなくてはならない。

- (2) なぜ授業でICTを活用するのか ～Society 5.0で生きるための力を～

情報活用能力が重要な資質・能力であることは言うまでもなく、今後ますますその傾向は強まると予想される。児童・生徒の情報活用能力を引き上げるためには「情報」という一教科で取り組むのは不十分であり、学校生活のあらゆる場面でICT活用を進める必要がある。

また、様々なICTツールを活用することで、生徒の理解度の向上、能動的な学習の習慣化を実現できる点もICTを活用するメリットの一つである。例えば「動画を見る」という活動ひとつをとっても「プロジェクターで投影されたものを生徒全員が同じタイミングで一斉に見る」とことと「手で精細な動画をじっくり繰り返し見る」のでは子どもたちの理解度も学習への取り組みも大きく異なる。

「Society 5.0」を生きる子どもたちに「技術を課題解決・価値創造に活用する方法を想像する力」と「想像したことを実現する創造力」を身につけさせるためには、学校生活の様々な場面でICTを活用し、その能力を高めていく必要がある。

- (3) 授業におけるICT活用例 ～教育利用できる各種ツールの紹介～

- ① Teamsのファイル共有機能を用いてExcelを共同編集する

Teamsの「投稿」または「ファイル」に作成したExcelシートをアップロードすることで、チームの参加者と共同編集ができる。一人ずつ記入欄を設けたシートを共有することで、教師が生徒の意見を一度に見ることが可能となる。また、生徒の他者参照が容易となるため対話的で深い学びへとつながりやすい。

- ② Formsを利用したアンケートで意見の集約

Formsを利用すると、WEB上で生徒が回答した意見を即時に集計し自動でグラフ化することができる。時間のかかる集計作業不要でマスデータを活用することができるため、効率的に生徒全体の動向を把握することができる。

- ③ Jamboardを用いて視覚的に意見表明

Jamboardの付箋機能は討論の場などで生徒一人ひとりに意見表明させる際に効果的である。視覚的にどちらが優勢であるか一目でわかるだけでなく、話の途中でも自由に付箋を移動させることができるため、リアルタイムで生徒の心情の変化を見て取ることができる。

- (5) 総括 ～令和の日本型学校教育における教員の役割～

従来の「知識・技能を教え込む」ための授業から抜け出し、「知識・技能を実生活で使いこなせる能力を育成する」活動を実践していくためには、授業を構造から変える視点の転換が必要不可欠である。一見難しく感じるかもしれないが、この視点の転換ができればおのずとICT活用の有用性が見えてくるはずである。今後学校における授業は「単線型」から「複線型」に変化していく。その中で教員も「指導者」から「補助者・伴走者」へとその姿を変えていくことになるだろう。生徒が自ら課題を設定し、自分で課題解決をはかる活動が主となっていく中で、我々は「生徒に良い問いを持たせること」が必要な能力となっていく。小・中学校ではすでに授業が「学習者中心の教育活動」へと変化している。「主体的・対話的で深い学び」が高等学校で停滞してしまうことがないよう授業改善に取り組んでいきたい。

4 考察

学校教育における質の高い学びを実現し生涯にわたって能動的に学び続ける姿勢を育ませるためには、ICT活用が必要不可欠であることがわかった。一人一台端末の視覚的な情報を早く正確に伝えられる点や動画を自分の手で繰り返し見られる点は、実習の多い家庭科の授業と相性が良いように思う。実習における指示を動画や画像で示したり、厚生労働省や金融庁が出している高校生向けの動画を視聴させたり、まずは「見せる」場面で一人一台端末の利用を積極的に取り入れたい。生徒が自分のタイミング・自分のペースで学べる環境を作ることは「個別最適化の学び」の第一歩だ。今まで一斉授業で講義に使っていた時間を探究学習やプロジェクト学習などの「協働的な学び」の時間にすることができれば、知識の定着や応用力の育成にもつながるだろう。ICTの活用を通じて「学び方」の質的改善に努めていきたい。

5 おわりに

今回の研修により授業におけるICT活用について理解を深めることができた。「ICT機器を授業で使うこと」が目的化してしまうことがないよう、この基本理念を忘れず授業づくりに取り組みたい。

最後に本研修での講師を快く引き受けてくださった千葉県立流山南高等学校校長 滑川敬章氏に深く感謝申し上げます。本当にありがとうございました。